

辛亥革命100周年

孫文と日本人のかかわりについて

小坂 文乃

Kosaka Ayano

埋もれた史実

本年は中国革命の父、孫文が中心となって清朝を倒した辛亥革命から100年を迎える。

辛亥革命とは、1911年10月10日に起きた武昌起義から、1912年2月12日の宣統帝溥儀の退位までの期間を示すが、孫文の革命運動は1895年の広州起義から始まっている。

中華民国成立後も、袁世凱を中心とする北洋軍閥との戦いもあり、孫文の理念は孫文が自らの言葉で「革命尚未だ成らず」と表現しているように、実現しなかった。しかし、辛亥革命は君主政治の幕を閉じ、共和制国家を樹立した歴史的な革命とされている。孫文は中華人民共和国では「革命の父」、台湾では「国父」として、現在に至るも敬愛の対象となっている。中国国内には各地に中山公園、中山路など孫文の本名を冠した場所がある。孫文の妻となった宋慶齡は、孫文の死後、中華人民共和国の副国家主席を務め、死の直前には中華人民共和国名誉主席に称せられた。福祉や児童教育に注力し、「中国の母」として中国国民から広く尊敬されている。

辛亥革命は隣国中国国内の歴史的出来事であり、日本とは何の関連もないように思われるかもしれないが、実は日本とも深いかかわりがある。

2008年に胡錦濤国家主席が10年ぶりに国家元首として日本を訪問された最初の夜、当時の福田康夫首相が東京日比谷公園内にある日比谷松本楼にて夕食会を開催した。そこで胡主席が、ある歴史資料をご覧になる一幕があった。その資料とは、革命に資金を援助し、孫文と宋慶齡との結婚に尽力するなど物心両面でこの革命を支えた梅屋庄吉夫妻と孫文との交流を物語るものであり、梅屋夫妻の子孫のもとに残されていたものである。

辛亥革命の研究者の間では、孫文と日本とのかかわりについて研究も進んでいるが、一般的には知られていない。この歴史的事実について公にされる機会もなかった。実際、この夕食会の開催準備に携わった外交の実務担当者をはじめ、ほとんどの方が孫文と日本人との深いかかわりについてご存知ではなかった、というのが実

情である。

梅屋庄吉と孫文

孫文は革命生活のおよそ3分の1にあたる約10年近くを日本で過ごしている。その年月のなかで孫文とかかわりをもった日本人は300人以上いたと言われていた。詳細に研究をされている神戸孫文記念館館長、安井三吉氏によると、1500人にのぼるのではないかとのことである。

孫文は1895年の広州起義に失敗し、清朝政府から1000元の懸賞金がかけて以降、長い亡命生活を余儀なくされるが、日本はその亡命先であり、また革命運動の基地でもあったのである。

ここで、孫文に初めて出会った日本人であり、孫文亡き後も生涯にわたり日中の架け橋たらんとした梅屋庄吉について簡単にご説明する（筆者は庄吉の孫である）。

1868年長崎に生まれた梅屋庄吉は貿易商の息子として育った。鎖国時代より港が開かれていた長崎で育った庄吉は中国に憧れをもち、14歳で自分の家の持ち船に乗り上海へ渡る。上海で庄吉が目にしたものは、植民地化された中国の人々が欧米人によって屈辱的な生活を強いられている姿であった。日本の友人、兄弟である中国がこのような状態であってはならない。この体験が孫文の革命思想に共鳴するものとなった。

その後、庄吉は香港で写真館を開業。香港で英国人ジェームス・カントリー博士の紹介で孫文と出会う。1895年、孫文29歳、梅屋庄吉27歳の時である。「中日の親善、東洋の興隆、人類の平等について全く所見を同じうし、遂に固く将来を契うに至る」と庄吉はこの時のことを書き残している。

革命運動を画策していた孫文はこの時、梅屋庄吉より財政的な支援を約束され、第1次広州起義の実行に踏み切った。広州起義に失敗し、清朝政府から追われる身となった孫文は、庄吉とカントリーの勧めで初めて日本の地を踏むことになる。この時、庄吉は当時の金額で1300ドル（現在の日本円で約1000万円以上に相当）を孫文に渡している。その後、孫文は日本を革命運動の拠点のひとつとしていくことになる。

甲午（日清）戦争、義和団事件の敗北により中国の青年たちは国を救う道を探り、日本へ留学したものが多くいた。清朝政府も、日本は距離的にも近く、中国を近代化させるうえで手本にする狙いで日本へ留学生を派遣した。しかし、留学生の多くは、海外から母国をみることで危機感を強め、革命運動に身を投じるようになっていった。留学生たちはそれぞれの学校で新しい知識を学び、各種の団体を組織して活発に社会活動を展開し始めた。

孫文の革命運動と日本

孫文の革命運動の主要メンバーとなった黄興は弘文学院に留学していた。後に袁世凱に暗殺された宋教仁は法政大学と早稲田大学に、胡漢民は弘文学院と法政大学に、張継は善隣書院と早稲田大学に留学、陳其美は警監学校の留学生だった。また蔣介石、張群らは日本の軍事学校の卒業生だった。

在日留学生らは学術団体や愛国団体、清朝打倒を目的とする革命団体をつくり、活動した。この活動のなかで、留学生らと孫文の活動が「救国」を共通の目的とし、接近するようになっていった。宮崎滔天の仲介により、孫文の興中会と黄興の華興会が合流し、そこに章炳麟らの光復会が加わり、3団体が中心となって中国同盟会が結成された。同盟会の機関誌『民報』の第1号「発刊の詞」において、孫文は民族・民権・民生の三民主義を説き、これは「驅除韃虜」、「恢復中華」、「建立民国」、「平均地権」とともに辛亥革命の綱領になった。この『民報』発刊についても資金は梅屋庄吉が提供し、玄洋社の末永節、宮崎滔天の自宅を発行所にするなど日本人友人の協力があった。

1911年10月10日の武昌蜂起を機に、中国では各省が次々に独立を宣言した。Mパター商会を設立し、映画ビジネスで財を成した梅屋庄吉は革命軍に武器購入の資金調達で協力したほか、頭山満、古島一雄らの支援団体「有隣会」に資金を提供し、宮崎滔天や平山周ら大陸浪人や医療救護隊を現地に派遣した。また武漢に撮影隊を派遣し、辛亥革命の様態を映像に収めている。

当時アメリカにいた孫文に革命成功の様子をみせるために撮影したこの映像は、現在、中国中央電視台に貴重な革命資料として保管されている。

1912年、中華民国の臨時大總統に就任した孫文はその後、清朝の内閣総理大臣も務めた袁世凱にその座を譲ることになるが、帝政復活を宣言した袁世凱を倒すべく、第2、第3革命を起こした。第2革命に破れ、日本に亡命した孫文は革命同士らの分裂もあり失意の日々を過ごすことになる。孫文はこの時に秘書であった宋慶齡と東京で結婚したが、多くの問題を抱える二人の結婚を温かく見守り、尽力したのが梅屋庄吉夫妻であった。

埋もれた史実から新たな日中関係を

1924年11月、孫文は神戸で「今後日本が世界の文化に対し、西洋覇道の犬となるのか、東洋王道の干城となるのか日本国民が慎重に考慮すべきである」と帝国主義の道を歩き始めた日本人に対して「大亜細亜主義」の講演を行なった。翌年3月、孫文は北京で死去。

孫文死去後、日中関係は悪化していくが、梅屋庄吉はその後も、日中親善・東洋

平和を掲げ、孫文像を寄贈、「大孫文」の映画を企画するなど孫文との友情を貫いた。

辛亥革命に多くの日本人がかかわったことを冒頭に述べたが、孫文の革命を利用して自らの目的を遂げようとした日本人が大多数であり、中国では彼らのことを「仮朋友」と呼んでいる。

辛亥革命100周年にあたり、この革命は日本とも深い関係があったという事実を知ることは大切だが、同時に中国において、孫文と日本人の関係について「真朋友」と「仮朋友」とに分けて考えられているということも認識しなければならない。

胡国家主席が孫文と梅屋庄吉の史料をご覧になったことを皮切りに、昨年の上海万博をはじめとして、「孫文と梅屋庄吉展」が中国各地で開催され、多くの中国人にこの歴史が紹介されることになったが、これは梅屋庄吉が「真朋友」であったからである。

日中近代史の底に埋もれていたこの歴史を伝えることが新しい日中関係を築いていくうえで一筋の光になれば、子孫としてこれ以上の喜びはないと感じている。

こさか・あやの 孫文と梅屋庄吉研究センター顧問
<http://www.matsumotoro.co.jp>
ayano@matsumotoro.co.jp